

「殊に身體の健康に留意して榮養と衛生に注意し給食の施設をなせる事」

3、家庭及び社會との聯絡を緊密にし家庭教育の改善をはかること

4、保育は生活に即して具體的實際的にすること等

大變抽象的なことを申しましたが、日々幼児が登園いたしましたら、朝の挨拶、所持品の仕末、履物の仕末等いたさせまして含嗽をさせ、用便の躰、後朝會をいたします。朝會は最も嚴肅に集合、整列を正しく、宮城遙拜及び黙禱、朝の挨拶、訓話、等をいたしました後に幼稚園體操、「大阪市で作つたもの」歩行練習をいたします。その後肝油給與、室内保育、屋外保育、手洗、晝食「給食」いたします。御飯は家庭から持参させ副食物だけ幼稚園で作ります。食後の含嗽、自由遊で歸宅準備等各幼稚園で行ひます行事大差ありません。

最後に大阪の子供は商業地の子供であるだけに利害の觀念に誠に敏感でありますから、保育方針の第三項に示してあります新産業道の樹立云々といふ事を幼児の時から注意し公益優先の念を養はねばならないと存じて居ます。

大阪市の保育方針

- 一、國體の本義に基き皇民道德の萌芽を啓善すべし。
- 二、興亞の理想に則り、剛健なる心身の基礎的鍊成に努むべし。

三、大阪市の使命に鑑み新産業道の樹立に必要な精神の育成に留意すべし。

四、家庭との聯絡を緊密にし家庭教育の改善をはかるべし。

宮城女師附屬幼稚園

木村豊女

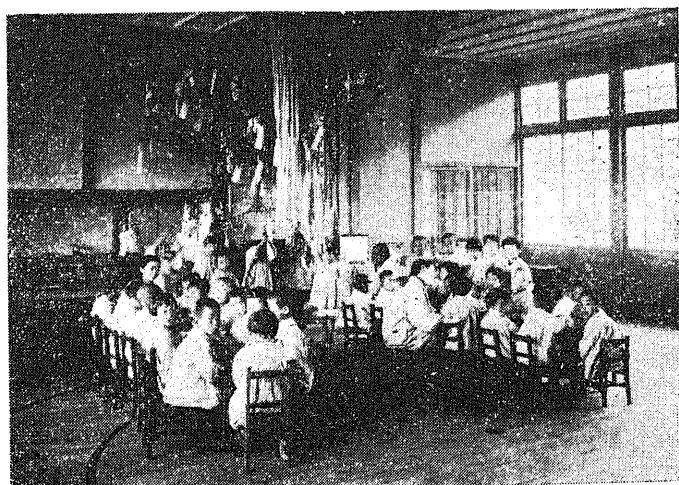
○當幼稚園の所在地

附屬幼稚園の所在地中島丁は青葉城址の近く水清き廣瀬川のほとりにあつて閑靜なる住宅街でございます。

昭和十一年四月十五日創立され職員數三名、現在園兒數八五名、一ヶ年保育の年長組一組、二ヶ年保育の年少組一組に編成、保育料一圓五拾錢、母の會費年額五圓五十錢

○保育方針

大きな時代の廻轉と共に幼児教育の目標が新しくならなければならなくなりました。日本精神で新しい世界を牽るるに先づ其の前提として、東亞の建設を目指すこの時代に、是までの様な甘い育て方は許されないので。日本精神に則り幼いながらも皇國民としての鍊成をするに共に常に勤勞を喜ぶ精神を養ふために作業教育を熟こねばり強きこで實踐してゐます。この正しい秩序ある習慣を養成することは心身の健全な發達を促しやがて第二



の天性が生れることを信じます。

○保育の實際

一、毎日集會の始めに宮城のお寫眞に對し奉り敬虔なる

氣持にて最敬禮をなし戰歿勇士の冥福を祈り皇軍將士の武運長久を祈願のため默禱をなす。

二、週一回月曜日に國旗を掲揚す(國民學校と共に)。

三、週一度本校及び國民學校と共に一齊に清掃作業をなす(小石拾ひ、庭掃き、床の乾布拭き等)。

四、四大節は國民學校と共に合同にて舉行す(時には本校と共に)これは幼きものなり、雖戰時下の今日、ある一定の短時間飽くまでも嚴肅なる態度をこらしめ度いこの意圖に基づくものである。

○母の會の事業

幼稚園教育に家庭の協力が如何に重要なかはその任にあるものゝ熟知のこゝである。當幼稚園の特色ともいふべき母の會は、この幼稚園創立と共に保護者八木ゆう氏を會長として設立されたのであります。八木氏は園の内容充實を目的として率先して後援のために勞を惜しまれず年毎に隆盛に赴き創立當時を思へば轉た今昔の感にうたるゝものがあります。次に母の會の事業を申述べます。

一、入園を許可したる後入園式前に保護者會を開き幼稚園の主義方針規約書類を配布一層認識を深めて協力を依頼す。

二、幹事は十名を選び期間を一ヶ年とす。

三、これ等の幹事はその都度集合相談したる事を各會員とす。

共に實行に移し、四大節、誕生會、行事の子供會の際には涙ぐましいまでの御骨折にてお世話下され此上もなく幼児たちを喜ばせてくれます。

四、毎月一回修養、講演、講習會を開き修養につとむ。

五、參觀日にはお母さんの來園を乞ひ幼児各々の問題につき懇談す。

六、「幼児の母」は各家庭に配布育児の資料をす。

七、家庭に聯絡園児の疾病につきては當園の看護婦によつて太陽燈治療を施行す。

○同窓會

同窓會は毎年四月三日神武天皇祭日を期して開催す。殆んき全部の修了生が附屬國民學校生徒なるを以て、六年生が各學年を指導して會の進行を圖り、仲々に面白き案を作り議長、國民學校先生たちをお招きしてお話なきをも伺ふ。尙ほ本年は創立以來始めて中等學校に男女の修了生を送りだしたる事にて同窓會もさりわけ盛會に行ひたり。

○遺兒の保育

昭和十四年九月以降戦歿勇士未亡人たちのために宮城特設國民學校訓導養成所が開設され、毎年十名内外の遺兒を保育することに成り、午前中は幼稚園児と共に遊ばせ、午後よりは特に周到なる心づかひを以て午後四時まで保育す。

日かげ

子どもには一ぱいの日なたと共に、靜かな日かげも與へてやりたい。

夏の日が強くなるに、木の葉が繁つて涼しいかげをつくつて呉れる。自然はなんこいふこまかな心づかひに、やさしいいたはりに行届いてゐることにあらう。勵ましと共にいたはりを忘れぬ。引き立てる共に慰はせることを忘れぬ。

日盛りの中を馳けまはつて、その廣い明るい光線に、ぐんぐん活氣をあほり立てられてゐる子どもが、ふき、涼しい木かげに来て、につこりこ、なごやかな顔を見せることがある。

日なたがなければ子どもは生きない。しかしまた、日なたばかりでも子どもは生きられない。日なたに生き、日かげにかばはれて生きる子どもではある。

わたしたちも、子どものために、一ぱいの日なたとなると共に、よき日かげにもなつてやりたいものだ。

——倉橋惣三著「育ての心」より——